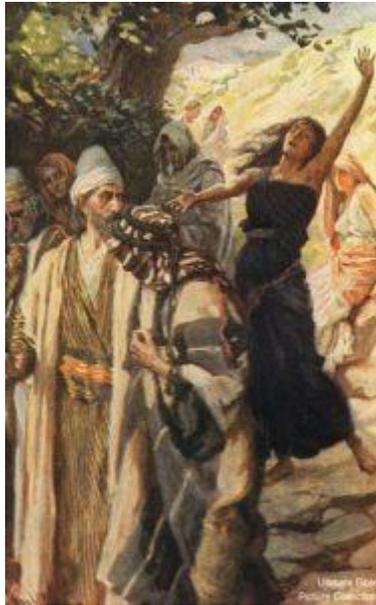


2023年10月29日 説教「獄中の賛美」

使徒の働き 16章 16～25節

第二次伝道旅行におけるパウロ一行は、トロアスからマケドニアに渡り、ピリピに来ました。紫布の商人ルデアが救われ、一家そろってバプテスマを受けました。主の恵みによる初穂でした。



### 1. 占いの霊から解放された女奴隷 (16～18節)

① 占いの霊につかれた女奴隷 (16) 「**私たちが祈りの場に行く途中、占いの霊につかれた若い女奴隷に出会った。この女は占いをし、主人たちに多くの利益を得させている者であった。**

ルカを含むパウロ一行が祈りの場に行く途中のこと、一人の若い女性と出会いました。彼女は悪霊につかれています。占いというかたちで、それが外に現われていましたが、彼女が占いをすることによって利益を得る者達がありました。彼女は奴隷でしたから、主人に服従することが原則で、命ぜられるままに悪しき霊によって占いをしていたのです。

② 女奴隷は叫び続け (17) 「**彼女はパウロと私たちのあとについて来て、『この人たちは、いと高き神のしもべたちで、救いの道をあなたがたに宣べ伝えている人たちです。』と叫び続けた。**

彼女はどのような経緯かはわかりませんが、パウロ達の後を追って行き、叫び続けていました。叫んだ内容は、「パウロ達は神のしもべで、救いの道を宣べ伝えている。」というものでした。文字にすればまともですが、その様子や話す調子が異常だったのです。この要約の裏ページにある絵のような様だったのでしょうか。

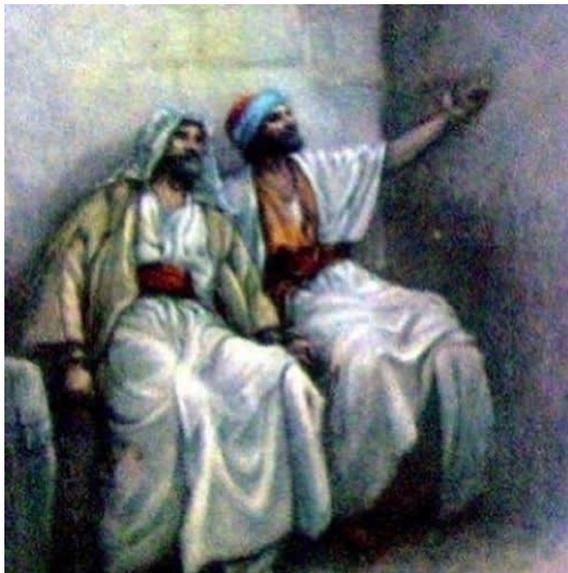
③ キリストの御名によって (18) 「**幾日もこんなことをするので、困り果てたパウロは、振り返ってその霊に、『イエス・キリストの御名によって命じる。この女から出て行け』と言った。すると即座に、霊は出て行った。』**

この女は幾日も同じことを続けました。叫ぶ内容は、褒め殺しのような状態であり、忍耐していたパウロも困り果ててしまいました。そして、振り返って彼女の内に取り付いている悪しき霊に、イエス・キリストの御名によって、「この女から出て行け」と命じたのです。すると、その霊は即座に出て行きました。マグダラのマリヤは七つの悪霊をキリストに追い出していただき、主に従った人です。この女奴隷も、悪霊を追い出していただき、キリストを知るに至った可能性があります。

### 2. 裁きに立たされたパウロとシラス (19～21節)

① パウロとイエスを捕らえ (19) 「**彼女の主人たちは、もうける望みがなくなったのを見て、パウロとシラスを捕らえ、役人たちに訴えるため広場へ引き立てて行った。』**

女奴隷の主人たちは、彼女が占いをすることによって、様々な人々からお金をむしり取っていたのです。しかし、悪しき霊が彼女から出るに伴い



彼女は占いをすることができなくなりました。儲けを生み出すことができなくなった女はお払い箱でした。また、儲け口を失わせた、パウロとシラスには怒って捕まえ、ローマ政府に通じた役人たちに訴えるため、広場まで引き立てて行ったのです。いくらかの金品を役人たちに掴ませたのかもしれませんが。

②長官たちの前に (20~21)「そして、ふたりを長官たちの前に引き出してこう言った。『この者たちはユダヤ人でありまして、私たちの町をかき乱し、ローマ人である私たちが、採用も実行もしてはならない風習を宣伝しております。』

そして、パウロ達は裁きの座に着かせられます。ピリピはローマの植民都市でしたから、普通は二人の行政長官がいました。彼らの前で、役人たちは言いました。「この者たちはユダヤ人で、この町をかき乱しています。そして、ローマ人である私たちが、決して行わない風習を宣伝しているのです」。イエス・キリストのことは一言も出ていません。まだ、福音がこの町に広まっていなかったかので、認識が薄かったのでしょう。それに、ここでパウロは自らがローマ市民権を持つ者であることを申し立てていないことも興味深いことです。

### 3. 獄中でのパウロとシラス (22~25節)

①むちで打たれて牢へ (22~23)「群衆もふたりに反対して立ったので、長官たちは、ふたりの着物をはいでむちで打つように命じ、何度もむちで打たせてから、ふたりを牢に入れて、看守には嚴重に番をするように命じた。」

群衆までもが扇動されたのか、パウロ達に反対して悪口を言ったのです。そこで長官たちは、パウロとシラスの着物をはがせ、むちで打たせてから、牢に入れました。そして、看守には嚴重な番を命じたのです。

②奥の牢へ (24)「この命令を受けた看守は、二人を奥の牢に入れ、足に足かせを掛けた。」

看守は、ふたりが逃げるのには一番遠い、奥の牢に入れ、なおかつ足には足かせを掛けました。どうやっても脱獄などできない状態です。もっともパウロたちには、脱獄する気などは全くありませんでした。しかし、牢に入れられ、自由に歩くこともままならない状態は苦痛であったことでしょう。

③賛美の歌を (25)「真夜中ごろ、パウロとシラスが神に祈りつつ賛美の歌を歌っていると、ほかの囚人たちも聞き入っていた。」

ところが、獄中においては思ってもみないことが生じました。夜になれば、牢獄全体に灯りはわずかあるだけで暗かったことでしょう。囚人たちは不安や恐れが押し寄せてきたと思われまます。そんな夜も更けゆく頃です。パウロとシラスは心を合わせ、神に祈りをささげました。そして、主への賛美の歌を歌ったのです。詩の内容もメロディーも平安と希望と喜びをもたらすものだったでしょう。他の囚人たちもそれに聞き入っていたのです。それは、聖堂における賛美の麗しさに劣るものではありませんでした。

### 《結論》

25節は、新約聖書のなかにあつて、キリスト教の麗しさが鮮やかに示されている光景と言えるでしょう。つまり、獄中という困難にありながら、真夜中に熱心な祈りと賛美の歌声が響いているというところに、靈的な喜びと慰めや癒しが伝わってくるからです。実際のところ、「ほかの囚人たちも聞き入っていた」とあるように、辛さが和らぐ喜びの空間であったと想像できます。パウロとシラスの歌声が音楽的に優れていたという面もあるでしょう。また、その詞の内容が心に打つものでもあったでしょう。しかし、それだけではなかったのだと思われます。つまり、そこには靈的な琴線が響かせられる何かがあったのです。

パウロはコリント書第二 11 章でこんなことを記しています。「彼らはキリストのしもべですか。私は狂気したように言いますが、私は彼ら以上にそうなのです。私の労苦は彼らよりも多く、またむちを打たれたことは数え切れず、死に直面したこともしばしばでした。」(23節)と語り始め、彼の受けてきた二十余りの難を記すのです。そして、「もしどうしても誇る必要があるなら、私は自分の弱さを誇ります。」(30節)と述べています。さらに、12章に至ってこう証ししています。「このことについては、これを私から去らせてくださるようにと、三度も主に願いました。しかし、主は『わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである』と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。ですから、私はキリストのために、弱さ、侮辱、苦痛、迫害、困難に甘んじています。なぜなら、私が弱いときにこそ、私は強いからです。」(8~10節)とあるように、パウロにとっては獄中にあるという困難や弱さのなかに、もっとも神の恵みが豊かに注がれるという確信があったのです。パウロは後にローマの獄中から記すことになる、ピリピ人への手紙のなかで、「いつも主にあつて喜びなさい。」(5:4)と励まし、「私はどんな境遇にあつても満ち足りることを学びました」(5:11)と証ししています。つまり、パウロとシラスは獄中にあつても心底から喜んで賛美の歌を歌っていたのです。

私自身、反省しました。讚美歌を歌う自分は、歌詞を理解し、メロディーをより美しく歌うことを心がけてはいる。しかし、果たして困難のなかにあつてこそ、主の恵みは豊かであることを心から信じて、賛美の歌声を奏でていただろうか。歌詞や音楽そのものの中に神の恵みがあるのは確かだ、でも、試練や辛さを背負いこんだままで讚美歌を歌っていたのではないか。困難をも委ねて賛美してきたかという、そうではなかったと告白します。

今こそ、私たちはあの獄中で真に喜ばしく賛美の歌声をあげていたパウロとシラスのように、賛美をしていきたいのです。試練を委ね、賛美しましょう。そこに神の恵みが豊かに現れるのです。歌詞の意味やメロディーがよくわからないこともあるでしょう。でも、弱さのうちに働いてくださる主を信じる靈性こそが肝心です。その信仰の心をもって賛美をささげていきましょう。